

2013年7月19日  
放射線から子どもたちを守る三郷連絡会  
代表 大場 敏明  
放射線から子どもたちを守る三郷親の会準備会  
呼びかけ人代表 川上 貴子

三郷市議会議員選挙に立候補されている27名に放射線対策についての公開質問状を行って

はじめに

**1 なぜ、私どもが三郷連絡会を結成し、子どもたちを守る活動に取り組んだのか。そして今回、市議会議員選挙にあたり、何故、立候補者に公開質問状を行ったのか。**

詳しくは次ページに説明してありますが、埼玉県で最も放射線線量が高い、ホットスポット三郷市で、子どもたちを守る活動は、三郷市の大人たちの責任であり、現在および今後の長期に及ぶ三郷市政の重点課題のひとつであることです。放射線感受性の強い成長期の子どもたちにとって、三郷市が安心して生活し、成長していける環境になっているかどうかは、極めて重大な問題です。原発事故後2年4ヶ月の今、今後の4年間の市政を決定する市議会構成が決まる、この市議会議員選挙での大争点の一つであることは覆い隠しようがありません。しかし選挙公報を見る限り、この放射線対策に触れている方は数名しかおられず、8割以上の候補者が全く政策を述べておりません。これでは、争点隠しであり、極めて遺憾に思い、あえて今回の公開質問状活動とさせていただきました。

**2 この度の三郷市議会議員選挙に立候補された27名の方に告示前の7月10日に「今後の放射線への対応について」の公開質問状を郵送させていただきました。また、告示後の7月17日には回答が頂けていない候補者の方に直接候補者や選挙事務所へ行って再度、手渡ししてきました。**

今回、私たちの質問に対し回答を頂いた方、または回答辞退・無回答など、結果が出ましたので公表させていただきます。

立候補者27名中、回答者は8名です。なお、具体的な回答は頂けませんでした。選挙期間中でなければ回答すると返事を頂き、今回は回答を辞退された方が3名です。その他16名は無回答でした。

回答していただいた8名の方の5つの質問に対する回答は以下の通りです。

- ① **三郷市の放射能対策室について** 全員が更なる対策の強化が必要と判断しています。
- ② **健康調査について** 全員が甲状腺エコーを含めた健康調査が必要と判断しています。
- ③ **土壌など放射性廃棄物の処理について** 全員が国または市が住民の協力を得て処理をするべきと回答しています。
- ④ **2012年6月に成立した「原発事故子ども被災者支援法」に対して**  
6名が三郷市を支援法の対象地域に国へ要請する。  
2名が国への要請は慎重に判断すべき。
- ⑤ **原発ゼロについて** 6名が直ちに、全原発の稼働停止を行うべき。  
2名が2030年代までに段階的に減らす。

以上、質問状に対する回答結果でした。

ご協力頂きました候補者の皆様には心から感謝申し上げます。

## <参考資料>

### 放射線から子どもたちを守る三郷連絡会について

(ホームページ <http://misato-rad.jimdo.com>)

**世話人** 2011年6月4日 結成。代表世話人・大場敏明(アカシア会理事長・医師)。世話人・大場文江(クリニックふれあい早稲田副院長 小児科医師)ら市内小児科医、宮崎康(前・健和会理事長)、浅草秀子(NPO 法人ワーカーズコレクティブ青い空・理事長)、高橋こずえ(つくし保育園・園長)、他

**設立趣旨** 三郷市が首都圏・関東でも最も高い「ホットスポット」であること、事故直後の放射線被ばくに関し有効な対策を打てなかったことの反省、世界有数の地震多発地帯日本の狭い国土に世界一の密度で原発建設を許してしまったことの反省、福島の子供たちへの支援につながることを願い、三郷での放射能汚染から子どもを守る運動での協力行動を強化するために結成しました。

### 私たちが、放射線から子どもたちを守る活動に取り組んでいる理由(代表・大場)

三郷市が首都圏・関東でも最も高い「ホットスポット」であることが第一の理由です。又これは人類が初めて直面する同時多発原発事故により引き起こされた人災で、我々も含む日本の大人たちが原発依存の社会を許してきたこと、その根底にある「安全神話」を批判しつつも打破できなかったことも関係しています。大地震が起きれば、原発大災害が起こる危険が指摘されてきたにもかかわらず、世界有数の地震多発地帯・日本の狭い国土に 54 基もの原発を結果的に許してしまったとの痛恨の思いからです。

代表の大場は 1973 年に医学部を卒業し医師になりましたが、その頃から日本で原子力発電所建設が本格的に始まり、その後毎年のように原発が建設され、今では54基にまで増えています。私は被爆者医療にもかかわってきた医師として、放射線被害の問題点や怖さを身に沁みるほど学んできました。たとえ事故を起こさなくても、原発には大きな問題があることも認識していたわけです。そのため、原発建設やプルサーマル開発には反対してきましたが、押しとどめるだけの力ある運動とはなりません。そして、次々と原発が建設させられた、結果的に許してしまったことになる。事故直後、日本の大人の世代の責任というものを感じ、慙愧たる思いを抱きました。

その後、三郷市がホットスポットであることが分かりました。事故直後から放射性物質が周囲に飛散し、福島県をはじめとした周辺地域を汚染していることが問題になりました。その際、この三郷にも何らかの影響が及ぶ可能性がないとは言えないとは思っていたものの、福島第一原発から 200 キロ離れており、まさかホットスポットにまでなるとは考えてもいませんでした。結局、無警戒だったと言わざるをえません。その結果、事故からホットスポットであると分かるまでの間、われわれも含む三郷市民が全く無警戒で被ばくした。この放射線対策の遅れへの責任も免れない。もっと警戒していれば、早めに何らかの手が打てたかもしれないと思いました。

医師として被爆者医療にかかわった経験から放射線障害の怖さを知りながら原発建設とその拡大を阻止できなかったこと、また、事故が起きてしまった際の対策について不十分だった責任があること、我々の世代の責任、又市民の健康を守る医師の責任として、本格的な放射線対策を進めなければならないと連絡会の活動を提案したのです。これまで市に 5 回提言してきたことを含め、今後も三郷の子どもたちを放射線から守るため、みんなでしっかりと協力して行動していかなければならないと考えています。そして、この三郷での活動が、関東周辺の放射線対策強化へとつながり、さらに最も深刻な被害にあっている福島の子どもと人々の放射線対策強化と支援へとつながっていくことを期待して、連帯して活動しています。